

夏休みイベントのご報告 その1

事務局長 廣瀬 信一

毎年恒例になりました夏休みのイベントの中から、今回新たに取り入れた「ミニミニ実験コーナー」と8月17日(金)、18日(土)2日間に渡って開催した「バット製作実演」、20日(月)に行われました「親子クラブ製作教室」について報告を兼ねて紹介いたします。



「ミニミニ実験コーナー」は、昨年は短期間で回数も少なくスポーツ的な意味合いでの開催でしたが、夏休みの自由研究や課題対策としては大変好評でしたので、今年は7月28日(土)～9月2日(日)の期間中、上記の特別企画の3日間を除き、毎日2回、殿堂ホールでそれぞれ約30分行いました。先生役は、当館の学芸員と司書が交代であたりました。実験内容は、「変化球のひみつ」、「イチロー選手のスパイクの重さをはかってみよう」、「中村 剛也選手のバットの長さや重さをはかってみよう」などでした。タイムリー性を重視したテーマでしたので、関心も高く熱心に聞き入り、そのまま自由研究のテーマにする子どもも多くいました。

「バット製作実演」は2004年以来連続9度目の開催となり、今回は2年振りにミズノテクニクスの渡邊 孝博クラフトマンにご来館いただきました。両日とも1日3回、各1時間行っていただきましたが、巨人戦開催日とも重なり各回とも多数の観客で賑わいました。バット製作の工程や原料の木材についてのお話、さらに小学生の希望者には「紙やすりかけ」の体験など、実際のクラフトマンの仕事の一端を経験することができ、良い思い出となったと思います。最後の質問コーナーでは、自由研究目的の子供達から「バット削りで一番注意している所はどこですか」、「クラフトマンにはどうしたらなるのですか」等、たくさんの質問がでましたが、それに対し一つ一つ分かりやすく丁寧にお答えいただき、終始和やかな雰囲気に包まれていました。



最後に、「親子クラブ製作教室」は小学生のお子さんとお父さん、お母さんが力を合わせて世界で一つのクラブを作るという大変夢のあるイベントです。昨年好評でしたので、引き続きの開催となりました。当日は、多数の応募者の中から抽選で12組24名の参加をいただきました。時間にして約3時間、ミズノのスタッフのご指導のもと、クラブ製作の最後の工程である「ひも通し」を体験していただきました。適度な難しさがあったことで、皆さん完成したクラブを手に達成感と満足感に浸っていました。また、自由研究向けのメモや作業風景の撮影をしている親子も多く見られました。最後に、記念写真をとりましたが、お子さん達の最高の笑顔が印象的でした。

夏休み期間中のこれらのイベントには、たくさんの方が参加され、野球の楽しさや面白さを感じていただけたのではないかと思います。



夏休みイベント報告 その2

「野球で自由研究！」&「ミニミニ実験コーナー」

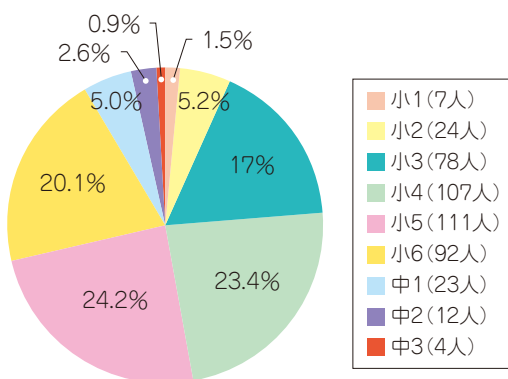
「野球で自由研究！」

7月21日(土)から9月2日(日)まで、図書室や企画展示室(7月28日から)などで、野球をテーマに自由研究を行う小・中学生をサポートする「野球で自由研究！」を実施しました。

これまで、図書室を中心で行っていましたが、今年は新たな試みとして、バット、グラブなどの実物を企画展示室で拡大して展示し、また、小・中学生を対象にした「ミニミニ実験コーナー」を開催しました。

自由研究を行なった小・中学生は458人で、昨年と比べ118人増加しました。学年別では小学校4年生と5年生が100人を超え、6年生とあわせた3学年の合計は全体の68%を占めました。また、小学校3年生が、昨年と比べ38人増の78人となり、自由研究を行う学年が低学年へと移ってきていることがわかります。(グラフ参照)

学年別の利用者数



学年別自由研究のテーマ

学年	歴史	用具	技術 (バッティング・変化球など)	野球場	その他
小1	2	3	0	0	2
小2	7	16	1	2	3
小3	18	61	3	7	7
小4	25	103	5	6	14
小5	34	85	5	11	17
小6	30	76	6	6	17
中1	5	10	4	1	1
中2	2	9	0	0	2
中3	1	2	2	0	1
合計	124	365	26	33	64

テーマ別にみると、企画展示室での用具の展示や、「ミニミニ実験コーナー」で用具のプレゼンテーションを行ったことで、野球用具をテーマに選ぶ子どもたちが昨年の136人から大幅に増え、365人となりました。子どもたちは、硬式ボールの原材料を実際に触ったり撮影したり、またボール製造工程などの資料を見ながら自由研究をまとめていました。(表参照)

「ミニミニ実験コーナー」

7月28日から9月2日までの(8月17日、18日、20日を除く)毎日2回(14時~、15時~それぞれ約30分)、殿堂ホールで行いました。

14時からの実験の内容は①変化球のひみつ(風船を使い、カーブの基本的な原理を説明)②昔と今のグラブをくらべてみよう!(明治時代、昭和初期、現在のグラブを比べる)③イチロー選手のスパイクをはかってみよう!(イチロー選手のスパイクの重さをはかり、小学生限定で実際に持って重さを体験する)でした。



15時からは①統一球のひみつ(統一球と公認球のゴム芯を落下させ、弾み方の違いを見る)②中村 剛也選手のバットをはかってみよう!(ライオンズ・中村 剛也選手のバットの重さや長さをはかり、小学生限定で実際に持って重さや長さを体験する)でした。

「ミニミニ実験コーナー」を見学するために来館された方も多く、34日間で約1,520人の方がご覧になり、この実験を見てテーマを決める子どももいました。自由研究を完成させた子どもたちが「また来年の夏も来ようね」と嬉しそうに話す姿も多く見られました。

来年も、実験や体験を通じて野球の面白さを感じてもらえるイベントを考えていきたいと思えます。



殿堂入りの人々を語る (37)

主人 呉 昌征を偲ぶ

石井 和子 (呉 昌征氏 夫人)



1995年野球殿堂入り
呉 昌征氏レリーフ

主人が亡くなって、25年になります。

実働20年のプロ野球人生を送らせて戴きました。

台湾の嘉義農林で、野球の才能を開花させ、甲子園出場を果たし、戦争を挟んで大きな壁に阻まれるも、乗り越えるという厳しい場面も多々あったかと。駿足をかわれ外野手に、強固な肩で左腕のピッチャーを務めたりと、少々ユニークな野球人生かと想像もいたします。

私生活では、世間知らずな面があったので、妻としては苦しい場面も数知れずありましたが、多くの方々に大事にして頂き、助けられました。

大恩人である近藤 兵太郎監督との出会い、若林 忠志阪神監督のお家でピアノというものに出会った娘、別当 薫氏との深い友情、山内 一弘氏に自転車の指南を受ける息子、美空 ひばりさんに抱いていただく娘、王 貞治氏とは引退後も大事にお付き合いしていただきました。他では味わえない思い出を、主人にたくさんもらった気がします。

結婚当時は、甲子園球場近くに住まいを構えましたが、周りは畑。遠征が多い主人は、心細い思いをしている私と子供達を大変心配していました。戦後間もないこともあり、物資調達に苦勞する時代でした。もちろん休みには荷物持ちと一緒に出かけました。野球音痴でしかも一回りも年下の私に、気を遣いながらも大事にしてくれました。

何より子煩悩でした。休みにはコーヒーが大の好物ということもあり、子供を自転車に乗せ、行きつけの喫茶店に出かけていくのが日課でした。また、サーカスにも何度か連れて行き、大歓声をあげる子供を嬉しそうに見守っていたことでした。孫にも同様で、毎週のように動物園巡りです。トーストを食べ、ジュースを飲んで大満足で帰ってきます。毎週です!!

みんな今でも「忘れられない、脳裏に焼きついている」と申しています。娘も商売をしていたので、子供達に淋しい思いをさせず、助けられたと申しておりました。

食べるのが好きでしたので、美味しかった料理は作り方を聞き、家族にもその味を振舞ってくれます。楽しそうにキッチンに立っています。休日の朝食は必ず特別のサンドウィッチを作ってもらいました。家族思いのまめな人でした。人が集まる時は、得意料理が出てきます。大きな蒸籠で、もち米を蒸し、ちまきを作ります。うずらの卵、豚角煮が入ります。絶品です。この味は未だに出せません。鉄なべですき焼き、ピーマンもこれまた絶品です。私も子供、孫に作り続けていますが、最近では少しは褒めてくれるのではと自負しています。

五男二女の次男だった主人は、年の近い弟と特に仲が良く、日本にも何度か遊びに来ました。土産のサトウキビというものを、初めて口にして感動したのを覚えております。

一時は台湾が台湾県であったことから、日本教育も盛んで、日本語も流暢でした。逆に本土が長い主人は、北京語が全く話せません。

皇居、新宿御苑、秋葉原ではまとめ買いする弟を手伝い、案内して巡っていました。弟は楽しい人で、酒がはいると岡 晴夫、青木 孝一、淡谷 のり子などを歌い始め、二人で合唱になるのを思い出します。妹とは、それぞれ北京語、日本語でしたので身振り、手振りを交えながら、手を繋いだり、腕を組んだり、再会を喜んでいました。

最近、著述業の岡本 博志氏により、「小説 人間機関車 呉 昌征」を台湾から出版して戴きました。国立嘉義大学からは、立派な本を送っていただき、主人の写真も校内に飾られているとか。感無量です。今なお生き続けているかと思うと、有難く、関係者の皆さんに、感謝の念を堪えません。

今後も、野球体育博物館並びに野球界の益々のご発展を、心よりお祈り申し上げます。



こんにちは図書室です



野球年報



今回は今から110年前の1902（明治35）年に創刊した「野球年報」をご紹介します。

野球年報は1902（明治35）年から1906（明治39）年を除き1915（大正4）年まで、発行された野球の年鑑です。サイズは縦17cm×横11cmで、第1号の内容は天外戦雲（対外国チームとの試合結果）、千紫萬紅（全国各地における大会の記録）、日本野球略史、錦繡綾羅（主に東京で行われた試合の結果）、東都餘塵（一高との練習試合の結果）、金條玉科（野球の技術論）、東海逐鹿（地方での中等学校などの試合結果）、関西争玉（関西での試合記録）、試合規則、附録（河東碧梧桐のベースボールという文章）の10編に分かれています。上記のように各地の試合記

録をはじめ、選手の集合写真も多く掲載されており、どのようなユニフォームを着ていたのか等、当時の野球を知る上で貴重な資料となっています。

この中で興味深いのは試合規則です。発刊の辞の中に「米国にて本年用うる新規則にして青井氏が訳せし処のものに註解を加えたるものなり」とあります。1902年にアメリカ・ニューヨークで出版された「Spalding's Official Base Ball Guide」に掲載されているルールと、同年9月21日に発行された「野球年報第1号」に掲載されているルールを照らし合わせてみると、アメリカのルールが正確に訳されているとともに、理解しやすいように注釈がついています。

奥付を見ると編集は伊東 卓夫となっていますが、実際に編集したのは発刊の辞の最後に名前が出ている久保田 敬一と高頭 正太郎だと思われます。彼らは一高（現在の東京大学教養学部）の卒業生で、野球規則を訳した前出の青井 鉞男氏（1959年殿堂入り）の後輩にあたります。一高時代には久保田氏はサード、高頭氏キャッチャーなどでプレーをしていました。久保田氏は1901（明治34）年に一高を卒業、1905（明治38）年には東京帝国大学工科大学土木工学科を卒業し、その後鉄道院に入り、1931（昭和6）年に鉄道次官となった人物です。

発行は東京の運動具店美満津商店で、伊東 卓夫氏はその創業者になります。美満津商店は1882（明治15）年に本郷区本郷5丁目10番（現在の東京都文京区本郷5丁目）に創業したスポーツ用品製造販売業者でした。図書室にも美満津商店発行のカタログがあり、当時の野球用具の形や値段を知る上で貴重な資料となっています。また、出版事業も行っており、今回紹介している「野球年報」や、以前このコーナーで取り上げた「魔球術」などの野球書籍をはじめ、多くのスポーツ書籍を出版していました。



現在の文京区本郷5丁目付近

野球年報は図書室で見ることができますので、是非ご覧ください。

司書 茅根 拓



もの 知ってほしいこんな資料(79)

1907(明治40)年 国内最初の有料試合入場券

1903(明治36)年秋より早慶戦がスタート。翌年、早慶両校が当時最強といわれてきた一高をそれぞれ破ったこともあり、早慶戦はより大きな注目を集めるようになります。しかし1906年秋、1勝1敗で迎えた第3戦の前に、応援の過熱などを理由に早慶戦は中止となります。

この時代の日本球界におけるもう一つの大きなトピックとしては、海外との交流があげられます。1905年には早大が渡米遠征を挙行、当時の最新の技術や戦術を学んで帰国します。1907年以降、毎年のように海外から野球チームが来日して国内のチームと試合が行われ、日本野球は発達していきます。

今回紹介するのは、今から105年前の秋、1907(明治40)年のハワイ・セントルイス来日時の試合の入場券です。このチームは同年のハワイリーグを制した強豪チームで、慶大の招待により来日しました。同チームが野球試合を目的として来日した最初の海外チームであり、また、この試合は招待費用を集めるため、入場料を徴収して試合を見せる日本初の有料試合として開催されました。



写真左は11月7日(6日順延)に行われた早大との第1戦の入場券、右は11月12日(9日順延)の慶大との第3戦の入場券で、大きさは7.5×11.2センチです。ハワイのセントルイスカレッジのOBを中心としているとのことで、入場券には聖路易(セントルイス)大学と紹介されています。

各入場券の左上には「会費 白60銭、青30銭、赤10銭」と入場料金が明記されています。以下で紹介する当時の書籍「野球年報」が40銭、月刊誌「運動之友」が11銭ですので、入場料の値段としては、比較的高価ではないかと思われます。

「野球年報 第6号」(1908年)では、第1戦前の様子を、「10月31日は三田台に府下幾万人の待焦れたる布哇対慶應野球大試合の行わる日なり 午後一時慶應選手は鼠色ユニフォームを着て先ず入場し 次で米国選手は牡丹色の帽に紺色のユニフォーム美しく…」と紹介しています。

両校の試合結果は右表の通りで、慶大は5試合を行い2勝3敗、早大は3試合で3敗の結果でした。これらの試合に出場したメンバーで野球殿堂入りしているのは、慶大は捕手・福田 子之助(島田 善介)、二塁手・桜井 彌一郎、早大は投手・河野 安通志、二塁手・押川 清、中堅手・飛田 忠順(穂洲)の計5選手です。二塁手として知られている飛田氏ですが、同年入学の新人で、この時はセンターとして出場、翌年、押川選手が卒業すると主にセカンドとして活躍します。

「運動之友 第2巻第11号」(1907年11月25日発行)の巻頭で、早大の安部磯雄部長がハワイ・セントルイスと早慶両校の戦いぶりを以下のように評しています。

「我野球団が彼等の位地に達するには尚ほ十年位の星霜を要することであろう。彼等は我等の敵手としては余りに強過ぎたけれども、今秋の野球界を賑わしたる点に於ては深く慶應に謝せねばならぬ。亦慶應及び早稲田の選手が彼強敵に対してアレ程までに戦ふたのは失敗ではなくて成功であると言はねばならぬ。」と早慶両校の健闘を称えています。

これらの入場券は、野球の歴史コーナーで11月末までの予定で展示中です。ぜひご覧ください。

学芸員 関口 貴広

10月31日	慶大	5-3	ハワイ
11月7日	ハワイ	2-0	早大
11月9日	ハワイ	4-2	慶大
11月10日	ハワイ	4-0	早大
11月12日	ハワイ	4-0	慶大
11月14日	ハワイ	10-1	慶大
11月16日	ハワイ	9-2	早大
11月18日	慶大	5-4	ハワイ

球場：慶大三田綱町球場



「公益財団法人」認定取得に向けて ～その①～

事務局長 廣瀬 信一

今号から数回に分けて、「公益財団法人」認定取得に向けての当館の取組みと進捗状況をご報告いたします。

改正前の民法第34条に基づき設立された民法法人（＝社団法人、財団法人）は、新公益法人制度施行の平成20（2008）年12月1日をもって自動的に、「特例民法法人」（＝特例社団法人、特例財団法人）となり、「公益社団法人」又は「公益財団法人」への移行を希望する場合は、平成25（2013）年11月30日までに、所要の申請書を提出して、行政庁の認定を受ける必要があることは、既にご存知の方も多いと思います。

《公益法人の認定を取得すると》

①「公益財団法人」の名称が使える、社会的な信頼度が高くなります。

②公益が目的の事業は非課税。また、寄付金の税金が優遇されるなど、税制面で優遇されます。

野球界では、すでに日本学生野球協会、全日本軟式野球連盟をはじめ各連盟・協会・団体が公益の認定を取得しています。

当館でも、新制度に対応すべく平成19（2007）年から経理規定等の内部諸規定の整備、基本財産の一部処分・補填等を実施し準備に取りかかりました。ただ、まだその段階では方向性として、新公益法人への移行が示されただけでした。

具体的な対応は、平成23（2011）年6月の理事会・評議員会において、評議員選定委員会の設置と評議員選定委員のメンバーが承認されたことが始まりで、その間「寄附行為」の変更等はあったものの、これを契機に対応策が順次進められて行きました。

まず、様々な課題を達成していくために同年7月に顧問税理士の方を含めたプロジェクトチームを発足させ、毎月1回会議を開き認定取得のための具体的活動を開始しました。10月には、理事・評議員の書面決議により正式に「公益財団法人」への移行と内閣総理大臣への認定申請が承認されました。また、文科省からは最初の評議員の選任方法は、評議員選定委員会を設置して、当該委員会で決定するという「最初の評議員の選任に関する理事の定め」が認可されました。

申請は内閣総理大臣又は都道府県知事に対して行いますが、当館としてはどちらにするかの、判断が難しく、文科省と東京都の公益法人担当者に各々判断を仰ぎに相談に行った結果、両担当者とも当館の主要事業である日本野球に顕著な功績があった人を表彰する殿堂事業が、公益目的事業に該当し、その対象者は国籍を問わないため、申請先は内閣総理大臣が妥当との見解をいただきました。

新公益法人制度のもと公益財団法人として新たにスタートする時期を平成25（2013）年4月1日とし、平成24（2012）年6月、それに向けての各種資料作りに取りかかりました。

次号では、現行の「寄附行為」に替わる「定款」そして「組織体制」についてご報告いたします。

野球体育博物館 トピックス（2012年8～10月編）

【8月17日、18日】 スライリーが来館しました！

広島東洋カープのマスコット「スライリー」が来館しました。今年殿堂入りの広島OB、北別府氏、津田氏の殿堂入り記念展の前でファンと記念撮影や、館内を一周してたくさんのファンと交流しました。

クラッチ、クラッチーナと廣瀬館長



ファンとの記念撮影

【8月25日】IBAF TCクリニック受講者来館！

国際野球連盟（IBAF）の技術委員（Technical Commissioner）クリニックの受講者が来館し、館内を見学しました。



TCクリニック参加者

【9月19日】 マーくんとクラッチ、クラッチーナが来館しました！

千葉ロッテマリーンズのマスコット「マーくん」と、東北楽天ゴールデンイーグルスのマスコット「クラッチ」と「クラッチーナ」が来館し、館内でたくさんのファンと交流しました。

←村田兆治氏のレリーフの前で、
マーくんと球団チアバフォーマーM☆Splash!!のみなさん





祝！ マドンナジャパン IBAF女子野球W杯3連覇!!! 3大会優勝トロフィー特別展示



野球体育博物館では、女子野球日本代表（マドンナジャパン）のIBAF女子野球ワールドカップ3連覇という快挙達成を記念して、9月4日(火)より年末までの予定で、館内エントランスホールにて3大会優勝トロフィーを特別展示しています。この他にも、第5回大会決勝戦ウイニングボール、同大会MVP磯崎 由加里投手着用ユニホーム、3大会日本代表優勝記念写真も併せて展示しています。ぜひご覧ください！

女子野球ワールドカップ Women's Baseball World Cup

国際野球連盟 (IBAF) 主催の女子の世界大会。2004年に第1回大会がカナダで開催され、以降2年ごとに開催されている。

年度	回数	開催地	優勝	準優勝
2004年	第1回	カナダ	アメリカ	日本
2006年	第2回	台湾	アメリカ	日本
2008年	第3回	松山	日本	カナダ
2010年	第4回	ベネズエラ	日本	オーストラリア
2012年	第5回	カナダ	日本	アメリカ

博物館からのお知らせ

▶ 理事・評議員

任期満了に伴う役員・評議員の改選を行い、理事4名は再任、新任は3名、監事2名は再任、評議員は15名が再任、新任は5名となりました。

「公益財団法人」への移行を前提に、理事・評議員の定数を変更いたしました。

新任

《理事》

- 大森 一人氏 (公益財団法人全日本軟式野球連盟会長)
- 内藤 雅之氏 (公益財団法人日本学生野球協会常務理事)
※評議員を退任して理事に就任
- 下田 邦夫氏 (一般社団法人日本野球機構事務局長)
※評議員を退任して理事に就任

《評議員》

- 宗像 豊巳氏 (公益財団法人全日本軟式野球連盟専務理事)
- 佐々木 毅氏 (学習院大学教授)
- 山田 博子氏 (国際野球連盟女子野球委員)
- 崎坂 徳明氏 (財団法人日本野球連盟事務局長)
- 井原 敦氏 (一般社団法人日本野球機構事務局長次長)

退任

《理事》

- 坂井 信也氏、白石 興二郎氏、宮内 義彦氏、島田 亨氏、八田 英二氏、岡部 英男氏、板橋 一太氏

《評議員》

- 加藤 良三氏、林 有厚氏、鈴木 義信氏、川島 勝司氏、後 勝氏、奥島 孝康氏、花井 史朗光氏、井野 修氏、前川 芳男氏

▶ 平成25年 野球殿堂入り記者発表

平成25年の野球殿堂入り記者発表は、来年1月中旬に館内の野球殿堂ホールにおいて行う予定です。

日時につきましては、後日当館ホームページでお知らせいたします。

▶ 職員

10月1日付で、新職員が加わりました。

皆様との長いお付き合いを、よろしくお願いいたします。

《学芸部 学芸員》 篠塚 真理子 略歴



神奈川県出身

慶応義塾大学文学部 (美学美術史学専攻)

2005年卒業

イギリスのレスター大学博物館学部修士課程

2008年卒業

ロンドンのクリケット博物館他に2008年から2009年まで勤務し、コレクション管理業務に携わる。

2012年10月1日より当館の学芸員として勤務。

● 博物館のご案内

場 所 東京ドーム21ゲート右

開館時間 3月1日～9月30日 AM10時～PM6時

10月1日～2月末日 AM10時～PM5時

(入館は閉館の30分前まで)

入館料 大 人 500円 (300円) } () は
小・中学生 200円 (150円) } 20名以上の団体
65歳以上 300円

休館日 月曜日(祝日、プロ野球開催日、春・夏休み中の月曜日は開館)
年末年始 (12月29日～1月1日)

《11月・12月・1月の休館日》

11月 5日・12日・19日・26日

12月 3日・10日・17日・29日～31日

1月 1日・7日・21日・28日

● 編集後記

紙面の都合により、「コラム 博覧/博楽」は休載いたします。

Newsletter Vol.22 / No.3

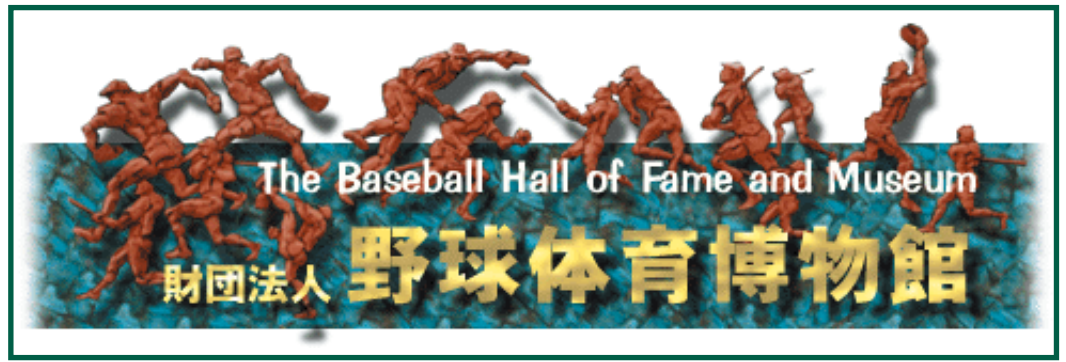
2012年10月25日発行

編集・発行 財団法人 野球体育博物館

〒112-0004 東京都文京区後楽1-3-61

Tel 03 (3811) 3600 Fax 03 (3811) 5369

<http://www.baseball-museum.or.jp/>



リレー随筆 (50)

10・8と名言

競技者表彰委員会幹事 沢田 啓太郎 (日刊スポーツ新聞社)

枕元の電話が鳴った。一瞬、自分がどこにいるのか分からず、ああ、ホテルかとぼんやりしながら、受話器を取った。

「もしもし」

「お前、今、どこにいるんだ！」

どこって、ホテルの館内電話だからホテルの部屋に決まってるだろ…、えっ？ しまった！

「もう新幹線は出たぞ。どうするんだ、このバカ！」。上司からの電話は切れた。時計をみた。午前9時32分。伝説の「10・8」を制した長嶋監督ら巨人一行を乗せた、東京への凱旋(がいせん)列車はその数分前、定刻通りに名古屋駅を出発していた。

1994年10月8日。シーズン最終戦を前に、69勝60敗と全くの同率で並んだ巨人と中日は、勝った方が優勝という「究極の一戦」に臨んだ。巨人長嶋監督が「国民的行事」と呼んだナゴヤ球場での試合は、楨原、斎藤、桑田の3本柱の力投と、落合、松井のホームランなどで巨人が6-3で勝った。

その夜。最終版の投稿を終え、ホテル近くの大衆すし屋で巨人の球団関係者らと祝杯を挙げたときには、午前2時を過ぎていた。ものすごい解放感だった。もし、巨人が負けていれば嵐のようなストブリーグが待っていた。長嶋監督の進退問題に発展しただろうし、この年、中日からFAで移籍した落合の去就も分からなくなる。実際、この日の試合後に落合から「もし負けていたらユニホームを脱ぐつもりだった」と聞かされたばかりだった。

いつ酔ったのかも覚えていないくらい飲んだ。明け方、ホテルに戻ったのはかろうじて覚えているが、その先の記憶はない。そして、電話が鳴った。

東京に戻り、会社に上がると巨人担当キャップの上司が待っていた。しぼられたあとに、こう言われた。

「いいか、お前が優勝したんじゃない」

返す言葉などない。ひたすら頭(こうべ)を垂れながら、胸の内で「名言だな」と感心していた。上司がズバリと指摘したように、自分が歴史的な一戦を制し、優勝したかのような錯覚に陥っていたのだ。

この年、もう1つ忘れられない思い出がある。巨人と西武の日本シリーズ。開幕前の最大の焦点は、初戦から落合が出場できるかどうかだった。落合は「10・8」の試合中に左足の内転筋を痛めていた。

開幕前日、私は東京ドーム地下にある関係者食堂の公衆電話から、落合の自宅に電話をかけた(携帯電話はまだ普及していなかった)。

「落合さん、出るんですか？ やっぱり無理ですか？」

「オレの腹は決まっている」

それだけ言って、落合は電話を切った。

落合は出る。出るつもりだ。私はそう判断して上司に報告した。そして「落合強行出場」という原稿を書いた。

翌日、初戦の先発メンバーに落合の名前はなかった。完全な誤報だった。あとで落合本人に聞いたところによると、打つ方は何とかなるが、守りと走塁はとて無理だったという。首脳陣は無理をしてでも出てほしいというのだが、落合は冷静に自分の体を省み、チームの足を引っ張ると判断して先発出場を回避したのだった。

無理しても出てほしい、ケガをおして出るなんて格好いいじゃないか。長嶋さんを男にするって言っていたし。私はそう勝手に思い込み、「浪花節」ストーリーを頭に描いていた。

落合は敵地での第3戦、DHで先発出場したが、第1打席に内野ゴロで一塁に走った際に再び内転筋を痛め、結局、1試合4打席で落合の日本シリーズは終わった。それでも、長嶋巨人は4勝2敗で日本一を獲得した。落合出場にこだわり、心中していたら、こういう結果になったかどうか。

あれから18年。2つの出来事を思い出すと、今でもじっとり、汗が出る。